

【傳承地】 式内成海神社は、現在、名古屋市緑區鳴海町に鎮座される成海神社がその遺存の社である。

【社名】 延喜神名式の九條家本と吉田家本には、ともに「ナルミ」と傍訓がある。この社名は、もとは地名によつたものと思はれるが、和名類聚抄には「成海奈留美」、また『熱田大神宮縁起』には、日本武尊の歌に「奈留美者、是宮酢媛所居之郷名、今云成海」と傍注が見えてをり、社名は「ナルミ」と訓んだと考へられる。

現在、町名は「鳴海」と書くが、奈良・平安時代の文献には「成海」と表記してゐる。恐らく、元來は「ナルウミ」であつたのが、「ウ」の音が消えたものであらう。『尾張國神名帳』に「成海天神」と見えてゐる。江戸時代には、一般に東宮・東宮明神及び東宮大明神と稱されてゐるが、これは、一説に熱田神宮の東の宮を意味するといふ『要知』
『郡誌』。

【由緒】 社傳によれば、當社は朱鳥元年（六八六）六月に神劍が熱田に還座された時、御鎮座になつたと云はれ『張州
張名所圖會』。『尾張志』尾、また『熱田御鎮座次第本記』に據れば、日本武尊の東征の緣由によつて祀られたと傳へてゐる。

社領は、和合村・傍爾本町（春木村）及び相原村（鳴海村）に若干あつたが、長祿年間（一四五七〜九）に收公されたこと傳へる『尾張志』。戰國時代には、今川義元、或いは天正十七年

（一五八九）に山口重政より神領が寄進された。江戸時代に入つて、享保元年（一七一六）九月に京都の吉田家より正一位の神階を授けられた吉田兼敬
宗源寛旨。ついで、明治元年に明治天皇御東幸の際、道筋の諸社へ官幣使が立てられ、當社には九月二十七日に勅使植松雅言を遣はされて奉幣があつた成海神社官幣
使御参向之覺。同五年五月に郷社に列格になり、昭和十六年十二月十五日に縣社に列せられた。

【所在】 現在、當社は名古屋市緑區鳴海町乙子山八五番地に鎮座され、名鐵鳴海驛より北約八〇〇メートルのところにある。社傳によれば、社地は、もと當社の南六〇〇メートルのところに鎮座される天神社の境内付近に存したが、應永年間（一三九四〜一四二七）に安原宗範が鳴海城を築いた際、その境内の大半は城地となつたために現在地に移轉したといふ。

【祭神】 日本武尊・宮實媛命・建稻種命の三柱をお祀りする。これら三柱の神を奉齋したのは明治以後のことであつて、江戸時代の地誌等には、日本武尊の一柱であると記してゐる『尾張國神名帳集説』
『張州府志』。

なほ、當神社の南方に御手洗の御井の古蹟があるが、これは日本武尊が追手をのがれ、船出されたところと傳へてゐる。現在もこの故實によつて、毎年例祭の時には神號を

記した板を扇川に流す「御船流し祭」が舊儀として執行される。また、當社の西方に「鉾の木」といふところに矛掛松があるが、これは尊が東征の時、矛を掛けて憩はれたところと傳へてゐる。『尾張志』

境内社は、元祿七年（一六九四）の『鳴海覺書』には、「末社 小社七社」とあり、ついで、『張州府志』には、熊野・白山・八幡・天王及び源大夫、社外の白山天神の社名が見える。文化年間頃に攝社の數も増大し、現在では、稻荷山社（宇迦之御魂神・大山祇神外三柱）・寶田社（宇迦之御魂神・御年神・保食神）・神明社（天照大御神・國常立尊）・熊野日白社（伊邪那美命・大山咋神・瀬織津比賣神外二柱）・北野社（菅原道眞命）・八劍社（五男三女神・天照大御神・須佐之男命）・御井神（御井神）・道祖神社（不詳の祭神外、八衝比古神・八衝比女神・久那斗神）・日割金刀比羅社（不詳の祭神外、大物主神・金山彦神・崇徳天皇）・八幡社（應神天皇外二柱）・子安社（伊邪那美命）・愛宕社（迦具土神）・今宮社（須佐之男命・天照大御神）・風神社（志那都比古神・志那都比賣神）・白山神社・菊理姫神の一八社に及ぶ。なほ、境外の鳴海町字城二八番地に天神社（日本武尊・宮實姫命・建稻種命）が鎮座される。

【祭祀】 十月十日が例祭の日で、御船流しの祭が齋行さ

れる。この祭は、當社創祀の縁由を傳承する神事とされるもので、それは、祭禮の日に神輿が境外の天神社に神幸し、その際、鳴海驛前の扇川畔に行列を仕立て參進し、祝詞奏上の後、御船板を川に流し放つ。この時、若者が川に入つてこれを競つて拾ひ、船靈、或いは家の守護として崇める習しがある。この日、町内より山車が四兩出て賑はふ。なほ、正月に特殊神事として世様神事（よさまじ）が行はれる。

現在、宮司は松岡榮治氏の専職。もとは牧野家が神職を世襲したが『張州府志』『尾張志』、當家は吉田家に屬してゐた。中世の榮えた頃には社人三〇餘家があつたといふ。『尾張志』

氏子は一、〇六〇戸。『明治神社誌料』に、三四四戸、昭和二十七年の神社明細帳に、一、〇六〇世帯とある。

【社殿】 昭和六十一年に御鎮座千六百年祭の記念事業として、社殿が修造された。本殿は流造、間口二間三尺五寸、奥行一間三尺で、その前に、祝詞殿 一二坪、拜殿 三〇坪があり、右方に直會殿（舊拜殿）、左方に參集殿が建てられ、これら三殿を翼廊でつないでゐる。その他に、神饌調理所 七坪、神輿舎 六坪、社務所 三六坪、社務所付屬建物 一〇坪五〇、茶室 四坪五〇。江戸期の社構については、『尾張名所圖會』に見えてゐる。

【境内地】 現在、境内地の廣さは、一三、二二坪。『慶

長十三年鳴海村雜錄』に「長二百四十間、横五十間」とあり、『寛文村々覺書』に社内四町歩、『明治神社誌料』『社要覽』・昭和二十七年の神社明細帳に一三、六四三坪とある。

【寶物・遺文】 現在、當宮には左の寶物を傳へてゐる。

扁額（一枚）……傳小野道風筆、「東宮日月歩」

棟札（五札）……寛正四年上置遷宮棟札等

鏡（十五面）……神輿の斗帳御鏡八面、初代根古屋城主安原宗範の侍女より寄進。

古文書（三通）……今川義元社領安堵狀（弘治三年十二月）

山口重政神領寄進狀（元龜元年九月）

山口修理進初穂米寄進狀（天正十年五月）

なほ、應永二年の祈年祭祝詞（江戸末期寫）、太刀（五口）、鉾（二柄）等も存する。

【考證】 この式内成海神社については、和名類聚抄に見える成海郷に鎮座されたと考へるのが至當であらう。この成海郷については、古く天平十五年（七四三）正月九日の優婆塞貢進文、同二十年四月二十五日の造寺所公文等に「尾張國愛智郡成海郷」と見えてゐる。

當時の成海郷の所在地については、一應、現在の鳴海町を中心とする地域であつたと考へられ、『地理志料』は鳴

海・大高中郷・阿野・木ノ山・名和・八ッ屋・有松・桶迫間・近崎・大脇・北尾・追分とし、また吉田東伍博士の『大日本地名辭書』は「今鳴海町、及び智多郡有松村・大高村・名和村等なるべし」と推定してゐる。この鳴海は江戸時代には東海道の三河知立と熱田宮宿の間に位置する宿場として賑はひをみせたが、この宿場は慶長年間に成立したもので、街村式の町並は、現在もその面影を残してゐる。

いま、古代に於ける鳴海郷の開拓を考へるに、當所は有史以前から、人々が居住するに相應しい場所であつたと思はれる。すなはち、古代にあつては天白川がかなり奥深く入つてきてゐたと推測され、川下にあたる沖積層の水田地（低湿地帯）は、潮流のある入江として鳴海潟を形成してゐた。そのため、當時の居住地は一段と高くなつた鳴海丘陵に居住地を求めたらしく、特にその山地と低地との漸移線には、縄文時代の貝塚が鉾の木貝塚・上の山貝塚・古鳴海貝塚・清水寺貝塚・光正寺貝塚等が多く存し、次いで、彌生時代には同じく丘陵地南端に城遺跡・電貝塚を残し、更には低湿地の「前の輪」にも居住したらしい。古墳時代に入つては、後期古墳が多くみられ、北方に大塚古墳・赤塚古墳・大根古墳・孤塚古墳・小塚古墳、南方にドンドン塚古墳・藤塚古墳等が存してゐる。

前述の通り、當社は移轉されたと傳へてをり、舊社地は現在御旅所の天神社の鎮座される宇城にあつたと云はれてゐるが、この地は丘陵の南端で、小高い丘の上に位置してをり、遡つては、鳴海潟に臨む見晴らしのいい絶景の地であつたと思はれ、また同時に遺跡も多く、矢切の電貝塚（縄文末々彌生）、城遺跡（彌生後期の遺物散布地）、當社の神宮寺とみられる鳴海廢寺の跡、須惠器以降鎌倉頃までの陶器を出土する矢切中世集落趾が存してをり、縄文から中世に至るまでの當地の中心地の一つであつたことが知られる。

この神社を奉齋した氏族については、現在のところ明瞭でないが、當時の地形等を勘案すると、付近の大高と同様、海で生活をする人々であつたことが想定できよう。

なほ、當時、本社が式内社とされた要因としては、一つには交通上の要地であつたことが考へられる。まづ第一には律令時代の主要幹線である東海道の通過地點であつたとされる點である。延喜式によれば、當國の交通は新溝・兩村（ふたむら）の驛家を通り三河國に通じてゐた。この道筋については、吉田富夫氏によれば、笠寺の西側を通過し、今の星崎の邊りからかなり下流の方で鳴海潟を渡り、鳴海の臺地縁を通り、矢切を経て、今の扇川に沿つて東に

進み、これを渡つて二村山にかかつたものと推察されてゐる。
（井後政晏）